

大学大衆化時代における‘First-Generation’の位相

河野 銀子

教育学部 学校教育講座

(平成14年9月30日受理)

要 旨

本稿は、アメリカの大学における‘First-Generation(大学第1世代)への関心や調査研究を略説し、日本の大学生に対して筆者が実施した調査をもとにしながら、日本における‘First-Generation’の諸特徴を捉え、大衆化する大学教育のあり方および高校と大学の接続問題を検討する素材を提供することを目的としている。

第一章では、アメリカの状況を述べる。アメリカの大学は、大衆化の対策として、‘First-Generation’への学業支援を行っている。‘First-Generation’とは両親が、高校卒業後の教育歴をもたない学生のことである。かれらは、ポストセカンダリーへの進学や在籍中の学習継続や修了について、そうでない学生より劣っている。NCESは‘First-Generation’のポストセカンダリーでの成功は、高校での十分な学業準備や親なども関与した進路選択のあり方にあるとしている。

第二章では、日本の大学における‘First-Generation’について報告する。P大学教育学部学生を対象として実施した質問紙調査を分析した。‘First-Generation’学生は回答者の6割強であった。‘First-Generation’学生は、女子より男子に多く、P県内に実家があり、教員免許取得を義務付けられていない課程に多い。調査の結果、NCESが報告したように、‘First-Generation’学生が成功していないと言うことはできないことがわかった。かれらは、高校からの学業支援や受験アドバイスなどを受けて大学へ入学し、入学後の学生生活もそれほど困難にはみえない。しかしながら、大学からの離脱につながりやすい傾向が見られる。それは授業で使う言葉を、理解できる‘First-Generation’学生は、‘non First-Generation’学生より少ないこと、退学を考えたり、勉学での悩みももっているのは‘First-Generation’学生に多いことなどにあらわれている。

第三章では、日本における教育達成と社会階層などの家庭環境に着目した先行研究の特徴を述べ、今後、‘First-Generation’学生にも注目することが必要だと指摘した。

は じ め に

本稿は、アメリカの大学における‘First-Generation(大学第1世代)への関心や調査研究を略説し、日本の大学生に対して筆者が実施した調査をもとにしながら、日本における

‘ First-Generation ’ の諸特徴を捉え、大衆化する大学教育のあり方および高校と大学の接続問題を検討する素材を提供することを目的としている。

1 アメリカの大学における ‘ First-Generation ’

(1) 大衆化大学における学生支援

SSS is designed to assist *First Generation*, low-income and/or students with disabilities in pursuit of a college degree.¹⁾

アメリカ合衆国のウィスコンシン大学のホームページに、このような記述がある。文中の SSS とは、*Student Support Services program*²⁾ の略称で、連邦教育省の助成金によって運営されているプログラムであることを意味している。SSS プログラムは、大学での学業的成功に不利な社会的立場にある学生を積極的に支援し、それらの学生が学習を継続する比率や卒業率を上昇させることを目標としている。同大学には、学生の学業面での努力と成功を支援することを目的とした「アカデミック・サクセス・センター」があり、SSS の他にもいくつかの学生向けサービスが提供されているが、ここでは SSS プログラムによって提供される内容をみてみよう。

- ・ 学術アドバイザーとの協力による学問的アドバイス。
- ・ 大学での成功に必要な学習スキルの基礎教育。
- ・ 書くスキルの向上支援。
- ・ 読み書きと数学に関するスキルの向上支援。
- ・ 専門コースにおける個人指導。
- ・ 英語のリスニング/スピーキングスキルの向上支援。
- ・ 就職相談。
- ・ 中間評価使用におけるモニタリング。
- ・ キャンパスライフのあらゆる面にかかわる支援。

これらを見ると、大学に入学したものの大学での学業についていけない学生たちが、うまく卒業していくための基礎的な学力（おそらくは講義についていくのに必要な最低限の知識やスキル）などを中心に提供している事がわかる。こうした学生の学業面での支援プログラムは、ウィスコンシン大学に限らずアメリカの多くの大学で提供されている。これらが、大学入学者の質的多様性（＝大衆化）に対応するための大学側の努力であることは言うまでもない。

ところで、注目したいのは ‘ First-Generation ’ というカテゴリーである。SSS プログラムでは、低所得者層や身体障害者と並んで、大学が支援すべき対象としている。‘ First-Generation ’ とは、近親者の中で初めて大学に入学した学生、という意味での第 1 世代である。近親者の範囲は、論者によって多少の幅があるものの、SSS プログラムでは「両親」とし、学士号を所有していない両親をもつ学生を ‘ First-Generation ’ students とみなして

いる。

(2) ‘First-Generation’の発見

‘First-Generation’とは上述のように「大学第1世代」である。したがって、全学生の両親すべてが学士とならない限り、どの時代にもどの大学にもどの階層にも‘First-Generation’は存在することになる。そういう意味では、‘First-Generation’の存在そのものは、何ら新しいカテゴリーではない。しかしながら、90年代のアメリカで‘First-Generation’というカテゴリーが創出され、経済的不遇者や身体障害者などと並ぶ大学における学習支援の対象として「発見」されるに至った背景は、一考すべき価値がある。

その背景には、アメリカの大学が高度な大衆化に対応せざるを得ない実状と、K-12からK-16への移行を志向する政策となんらかの関連があると筆者は推測する。以下に簡単に述べてみたい。

アメリカにおける高等教育の大衆化は、女性・成人・留学生・学力不足の学生などがニューカマーとして参入したことによって生じたが、かれらのもつ文化は伝統的學生おもに経済的・文化的に恵まれた中等教育終了直後の男性の文化とは異なっており、大学側が従来通りの教育を行うだけでは不十分になった（江原1989）。これらに対応するために、大学はリメディアル（補償・補習）教育などを実施してきたが、それは結果的に大学が高校教育の補習を引き上げたにすぎなかった。大衆化の進行とともにリメディアル教育は膨張し、やがて大学予算を圧迫するようになる。さらにリメディアル教育が、学力不足の学生の学力向上に効果をもたらすことより、大学教育全体の低下や学位の価値の低下を招くことが見えてきた（吉田1999）。こうした経緯は、大学での学業達成に不利な立場にある学生たちに対する、財政的にも内容的にも効率的でよりよい支援を提供する方法を模索することになったのではないか。最小コストで最大効果をあげるために、ターゲットグループ（またはフォーカスグループ）を特定し、そこに重点的支援を施す方法は国際協力の分野でよく行われるが、これに類似した発想が‘First-Generation’の発見の背景にあるかもしれない。

1994年に制定された連邦教育改革振興法『2000年の目標：アメリカ教育法³⁾』は、8項目にわたる「全国共通教育目標⁴⁾」を定めている。これにより、K-12（初等中等教育）における「目標・評価」政策が取られ、80年代に取りこぼした層を巻き込んだ全米の教育水準の向上が目指された。また、高度情報社会に必要な抽象化能力、システム思考、問題解決技能育成など、実社会で必要とされる準備をあらゆる生徒たち（就職するにしろ進学するにしろ）にさせることになった。さらにこれをベースにしたK-16（初等中等教育+高等教育）の教育体系構築により、K-12と高等教育の接続を試みようとしている⁵⁾。市川（1995）によれば、産業構造・職業構造の高度化あるいは技術革新などによって勤労者に求められる知識・技術・技能などの条件は高度化し、それが大学進学率を上昇させる‘プル要因’となる。労働市場で新たに必要となる能力が大学で獲得できるのであれば、どのようなキャリアを志望するにしても大学教育を受けることが必要となるわけで、そこから取りこぼされることは労働市場で不利な立場に甘んじることを意味する。このような産業

界や労働市場側のニーズは、大学への進学機会をどの高校生にも開いておくことを必要とする。そこで、‘First-Generation’が関心対象となってきたのではないか。かれらを放置しておくことは、国際競争の勝者を目指すアメリカ社会全体にとって得にならないからだ。かれらに大学教育を与え、親たちの世代より、よい職に就ける道を開くことは、労働力全体の質の向上をも意味する。こうして、機会の平等だけでは達成しなかった結果の平等をもたらすために、‘First-Generation’に十分な準備をさせる必要性が生じてきたのではないか。

以上の検討は暫定的で今後厳密な言及が必要であるが、アメリカでの大学大衆化の実態と政策が、‘First-Generation’への関心につながるものであるとみることは可能ではないだろうか。

(3) ‘First-Generation’ 学生の実態

ところで、アメリカではすでに‘First-Generation’学生の実態等に関する調査が行われ、結果が報告されている。NCES（全国教育統計局）が、そうでない学生との比較を試みているので、本稿の参考にしたい。NCESは、‘First-Generation’を高校卒業以降の教育歴をもたない両親をもつ学生とみなし、1998年には、‘First-Generation’の諸特徴を報告し⁶⁾、2000年には、高校での科目選択との関連を考察⁷⁾、2002年には、高校で‘non First-Generation’と同様の学業準備をした‘First-Generation’に関する報告⁸⁾をしている。それぞれの知見を以下に簡単に述べよう。

1998年には、ポストセカンダリー⁹⁾教育に進んだ‘First-Generation’学生の基礎的な特徴を把握している。それは、年長者、既婚者、低所得者層が多く、その多くは、4年制大学ではなく公立の2年制教育機関にパートタイム学生として在籍している。‘non First-Generation’学生より、リメディアル教育の選択率は高く、ポストセカンダリーで継続的に学習する学生比率や修了率は低いが、経済的支援があれば、もっと速く課程を修了できると言い、学士または準学士を取得したら、‘non First-Generation’学生と同じような職業に就くことを望んでいる。

2000年の報告では、高校での数学の教育課程が大学入学に強い関連を示すという先行研究（Riley1997）¹⁰⁾を踏襲し、‘First-Generation’学生と‘non First-Generation’学生の第8学年での代数の選択状況の違いが、ポストセカンダリーでの違いを生み出していること、しかしながら、代数より高度な数学を履修した場合には、‘First-Generation’学生であっても4年制大学への入学機会は増大すること、などを明らかにしている。また、学生の進路選択過程に親が参加したり、大学への応募過程に高校が関与したりした学生ほど、大学入学機会が拡大することも明らかになった。

2002年の報告では、高校での十分な学業準備がポストセカンダリーでの継続的な学習や学業達成を拡大することが述べられた。4年制大学における‘First-Generation’学生は、‘non First-Generation’学生よりポストセカンダリーでのGPAが低く、リメディアル教育の受講率は高く、学士をとるトラックでの継続率や修了率は低い。しかしながら、高校で高度なコースを選択していたか、あるいは大学入試の得点が上位4分の1であった学生は、‘First-Generation’学生と‘non First-Generation’学生との間のGPAに有意な差はみられなかった。また、高校で高度なコースを選択していた場合で、入学後継続的に履修登

録したり学位を取得する学生は、‘First-Generation’学生と‘non First-Generation’学生との差はなくなる。高校で高度なコースを選択しなかった学生の入学後3年目の在学率はことさらに低かった。これらより、‘First-Generation’学生のポストセカンダリーでの成功の重要な要因は、高校での十分な準備にあり、それは、‘non First-Generation’学生との学業達成の結果の差を縮小させると指摘している。

以上のように、NCESは‘First-Generation’学生のポストセカンダリーでの成功は、高校での十分な学業準備や両親なども関与した進路選択のあり方にあるとしている。

これまで、アメリカにおける‘First-Generation’学生についてみてきたが、次に、日本の場合をみていきたい。

2 日本の大学における‘First-Generation’

(1) ‘First-Generation’の調査について

ここでは、P大学教育学部学生を対象として実施した質問紙調査を分析し、日本における‘First-Generation’学生の諸相を把握したい。本調査はきわめて限定的な調査対象であるため、ポストセカンダリーにおける‘First-Generation’学生の多様な実態を把握することは難しいが、現時点では、これらをテーマとする調査研究はほとんどみられないため、今後の研究発展の一つの契機として何らかの示唆的な知見を得られるものと思われる。

P大学は、東北地方の国立総合大学である。『大学ランキング2003』（朝日新聞社）によれば、教員一人あたり学生数、学生一人あたり校舎面積、対象学生一人あたりの図書館貸出数の3項目の評価が、Bランク（上位30 - 40%）に位置し¹¹⁾、高校からの評価はAランク¹²⁾である。教育学部には、学校教育教員養成課程、生涯教育課程、人間環境教育課程があり、調査対象者は教育社会学を受講している学生160名である。まず、調査概要と、回答者の基本的属性、そして‘First-Generation’学生の基本的属性を示す。

調査の概要

調査時期：2002年4月

調査方法：集団自記式質問紙調査（第1回授業時）

調査内容：大学受験や高校での進路決定について、現在の学生生活について、授業で使用する言葉の理解度について、など

有効回答数：160（女子98、男子60）

回答者属性

課程：学校教育（51.9%）、生涯教育（31.2%）、人間環境（15.0%）

学年：3年生（91.3%）、4年生（5.6%）

実家の所在地：P県内（59.4%）、P県以外の東北（25.6%）、その他（15.0%）

現在の居住：自宅（45.0%）、自宅外（55.0%）

部活・サークル：スポーツ系（28.3%）、文化系（23.3%）、その他（5.0%）、入っていない（43.4%）

受験時の状況：現役（87.5%）、浪人（12.5%）

入試の種類：推薦（12.5%）、一般前期（64.4%）、一般後期（18.1%）
 父親が4年制大学卒業：36.9%（これ以外の学生が‘First-Generation’学生である）
 母親が4年制大学卒業：10.6%

‘First-Generation’学生の基本的属性

てみたように、‘First-Generation’学生は回答者の6割強であった。‘First-Generation’学生のうち、女子は57.4%、男子は42.6%で、‘non First-Generation’学生のうち、女子は70.2%、男子は29.8%である。また、女子の59.2%、男子の71.7%が‘First-Generation’学生となっており、男子のほうが多い。実家の所在地がP県内であるのは、‘First-Generation’学生（62.3%）の方が‘non First-Generation’学生（54.3%）より多い。

所属課程をみると、‘First-Generation’学生の47.5%が学校教育教員養成課程、33.7%が生涯教育課程、17.8%が人間環境教育課程となっている。‘non First-Generation’学生の場合には、順に60.5%、27.2%、11.9%なので、教員免許の取得を義務付けられている課程に所属する‘First-Generation’学生の比率は低いといえる。また、部活やサークルへの加入状況に、両群の差はなかった。

受験時の状況は、‘First-Generation’学生もそうでない学生も9割弱が現役であり、受験した入試の種類もほとんど違いはない。ただし、一般入試の後期日程で入学した‘First-Generation’学生は16.8%で、‘non First-Generation’学生（20.3%）よりやや少ない。

このように、調査対象者中の‘First-Generation’学生と‘non First-Generation’学生には、若干の差異がみられる。大雑把に捉えるなら、‘First-Generation’学生は女子より男子に多く、P県内に実家があり、教員免許取得を義務付けられていない課程に多いといえる。

なお、本稿では、前述のように父親が4年制大学を卒業していない学生を‘First-Generation’とみなしたが、本調査の場合、それは両親が4年制大学を卒業していない学生と結果的にほぼ同義である¹³⁾。

それでは、‘First-Generation’学生の高校時代と大学生活についてみていこう。

(2) ‘First-Generation’学生の高校時代

先に見たように、NCESは‘First-Generation’学生がポストセカンダリーで成功するためには、高校での十分な学業準備や両親なども関与した進路選択のあり方が重要だとしている。ここでは、調査対象者の高校時代について、‘First-Generation’学生と‘non First-Generation’学生の比較を試みたい。

出身高校

出身高校について尋ねたところ、‘First-Generation’学生は‘non First-Generation’学生より、学生数が300人未満の小中規模校が多い（72.0% > 62.7%）。また、4年制大学への進学率が90%を超える高校出身の‘First-Generation’学生は10.9%で、‘non First-Generation’学生（23.7%）の半分程度でしかなく、逆に4年制大学進学率が50%以下の高校出身の‘First-Generation’学生は38.6%に対して、‘non First-Generation’学生は22.1%である¹⁴⁾。このように、‘First-Generation’学生は、‘non First-Generation’学生より4年制大学への進学率が低く大規模ではない高校の出身者が多い。

受験準備

出身高校の大学受験情報が充分であったかどうか尋ねたところ、「とても充分」だと答えた 'First-Generation' 学生は22.8%で、'non First-Generation' 学生より約13ポイント少ない(表1)。また、高校3年生の夏休みの勉強場所を尋ねたところ、「First-Generation」学生の半数強は「自分の高校」と答え、「non First-Generation」学生より約14ポイント多い(表2)。このように、「First-Generation」学生は、受験情報が充分とは言えないが、高校を利用して学習していることがうかがえる。しかしながら、高校3年生の夏休みの平均学習時間は、「non First-Generation」学生には及ばない(表3)。「2時間以下」とする 'First-Generation' 学生は2割強で、「non First-Generation」学生の1割強より多い一方、8時間以上学習していた 'First-Generation' 学生は5%で、「non First-Generation」学生の半分である。

表1 高校の受験情報

	全 体	F G	N F
とても充分	27.5	22.8	< 35.6
まあ充分	54.4	60.4	44.1
やや不充分	11.9	9.9	15.3
かなり不充分	3.1	3.0	3.4
わからない	3.1	4.0	1.7

(注：表中の FG = First-Generation, NF = Non First-Generation. 以下同様。)

表2 高3夏休みの勉強場所

	全 体	F G	N F
自 宅	28.8	24.8	< 35.6
塾や予備校	5.0	5.0	5.1
自分の高校	48.1	53.1	> 39.0
公共の図書館	15.6	13.9	< 18.6
そ の 他	2.5	3.0	1.7

表3 高3夏休みの学習時間

	全 体	F G	N F
2時間以下	19.4	22.8	> 13.6
2 - 4時間	29.4	27.7	< 32.2
4 - 6時間	28.8	28.7	28.8
6 - 8時間	13.8	13.9	13.6
それ以上	6.9	5.0	< 10.2
D K	1.9	2.0	1.7

以上のように、' First-Generation ' 学生の高校での受験準備は、それほど充分ではない受験情報の中、学習場所として高校を利用しているものの、その学習時間はさほど長くないといえよう。

進学決定

就職や短大・専門学校ではなく、4年制大学への進学を希望した理由を表4のような13項目から3つまで選択してもらった(表の数値は各項目の選択率)。これらを見ると、' First-Generation ' 学生は、「資格を得る」や「就職を有利にする」などの実利志向や「好きな勉強」をしたいという意向がみられる。しかしながら、「教養を身につける」は3割程度で、' non First-Generation ' 学生の5割と比してかなり低い。これらから、' First-Generation ' 学生は、教養のようなあいまいなことより、わかりやすい成果を重視する傾向があるようだ。

表4 4年制大学志望理由(3つまで)

	全 体	F G	N F
自分の好きな勉強をする	68.1	72.3	> 61.0
教養を身につける	38.1	30.7	< 50.8
サークル・部活をする	10.6	8.9	13.6
友達をつくる	4.4	5.0	3.4
アルバイトをする時間を作る	0.6	0.0	1.7
資格を得る	43.1	45.5	> 39.0
就職を有利にする	43.1	46.5	> 37.3
高卒で就職は嫌だった	14.4	14.9	13.6
親の勧め	8.8	7.9	10.2
一人暮らしをする	6.3	5.9	6.8
遊ぶ時間をつくる	11.3	10.9	11.9
なんとなく	15.0	14.9	15.3
その他	8.8	10.9	5.1

表5 P大学教育学部受験決定時期

	全 体	F G	N F
高1前半	7.5	6.9	8.5
高1後半	2.5	3.0	1.7
高2前半	4.4	5.0	3.4
高2後半	5.6	5.0	6.8
高3前半	20.0	23.8	> 13.6
高3後半	59.4	55.4	< 66.1

次に、P 大学教育学部を具体的な受験先として決定した時期や受験を決定する際に重視したものについて尋ねた。高3になる前に決定していたのは、両群とも2割程度であるが、高3の前半か後半かをみると両群の傾向は異なっている。' non First-Generation ' 学生より ' First-Generation ' 学生の方が、前半に決定した割合が高い(表5)。(なお、受験決定時期については、高3時でのより細かい時期を設定すべきであったことが反省される。)

また、受験を決定する際に重視したものを、表6の14項目の中から3つまで選択してもらった(表の数値は各項目の選択率)。両群とも、「国立大学だから」や「大学入試センターの得点」を重視していることに違いはない。しかし、「受験科目や種類」を重視した ' First-Generation ' 学生は ' non First-Generation ' 学生より少なく、「進路指導教師のアドバイス」や「担任教師のアドバイス」を重視したのは、' First-Generation ' 学生に多いという特徴がみられる。

表6 P 大学教育学部受験決定要因

	全 体	F G	N F
大学入試センターの得点	58.1	59.4	55.9
受験科目の種類と数	42.5	37.6	< 50.8
進路指導教師のアドバイス	8.8	10.9	> 5.1
担任教師のアドバイス	24.4	26.7	> 20.3
親 の 意 見	11.9	10.9	< 13.6
きょうだいの意見	0.6	1.0	0.0
先輩の話	4.4	4.0	5.1
塾や予備校講師アドバイス	1.9	3.0	0.0
インターネットの大学案内	0.6	0.0	1.7
校 風	3.8	3.0	5.1
評 判	4.4	4.0	5.1
自宅から通学できる	20.6	20.8	20.3
国立大学である	76.9	76.2	78.0
そ の 他		12.9	6.8

このように、進学や受験決定行動には ' First-Generation ' 学生と ' non First-Generation ' 学生の間に差が見られた。端的に言えば、' First-Generation ' 学生は、4年制大学に実利性を求め、高3年時後半に高校の教師たちのアドバイスによって受験行動を決定している。

(3) ' First-Generation ' 学生の大学生生活

NCES は ' First-Generation ' 学生がポストセカンダリーで成功していない実状を明らかにしたが、本調査の対象者たちはどうであろうか。ここでは、大学生生活全般にわたる12項目に対する回答と、対象者たちが受講する授業において使用する言葉の意味に対する理解度をみていく。

学生生活

表7に、学生生活の満足度や生活のようす、悩みや不安を尋ねた結果を示した。

表7 大学生生活について

	全 体	F G	N F
現在の学生生活に満足か			
と て も 満 足	10.6	8.9	13.6
ま あ 満 足	53.1	57.4	45.8
や や 不 満 足	31.9	30.7	33.9
か な り 不 満 足	3.8	2.0	6.8
P大学に入学したことは満足か			
と て も 満 足	15.6	16.8	13.6
ま あ 満 足	52.5	54.5	49.2
や や 不 満 足	27.5	24.8	32.2
か な り 不 満 足	4.4	4.0	5.1
教員を志望しているか			
強 く 志 望	24.4	19.8	32.2
い ち お う 志 望	31.9	36.6	23.7
し て い な い	43.8	43.6	44.1
大学を辞めようと思ったことがあるか			
何 度 も あ る	15.6	15.8	15.3
1 度 は あ る	39.4	45.5	37.3
1 度 も な い	45.0	23.8	47.5
友達のことでも悩んでいるか			
と て も	7.5	5.0	11.9
少 し	21.9	25.7	15.3
ほ と ん ど な い	41.9	45.5	35.6
全 く な い	28.8	23.8	37.3
勉学のことでも悩んでいるか			
と て も	26.9	26.7	27.1
少 し	53.1	55.4	49.2
ほ と ん ど な い	13.1	10.9	16.9
全 く な い	6.9	6.9	6.8
卒業後の進路に不安があるか			
と て も	73.1	74.3	71.2
少 し	23.8	21.8	27.1

ほとんどない	2.5	3.0	1.7
全くない	0.6	1.0	0.0
4年で卒業できるか			
できる	47.5	47.5	47.5
多分できる	39.4	40.6	37.3
できないかも	10.0	9.9	10.2
できない	3.1	2.0	5.1
両親に大学であったことを話すか			
よくする	19.4	15.8	25.4
ときどき	55.0	56.4	52.5
あまりしない	18.1	19.8	15.3
全くしない	6.9	7.9	5.1
ボランティアをしているか			
いつもしている	5.0	5.0	5.1
ときどきしている	16.9	13.9	22.0
あまりしない	38.8	37.6	40.7
全くしない	39.4	43.6	32.2
今の自分に自信があるか			
とてもある	3.1	4.0	1.7
まあある	27.5	25.7	30.5
あまりない	60.0	60.4	59.3
全くない	9.4	9.9	8.5
P大学が好きか			
とても好き	11.3	9.9	13.6
少し好き	63.1	65.3	59.3
やや嫌い	22.5	21.8	23.7
とても嫌い	3.1	3.0	3.4

表7からわかるように、「現在の学生生活」や「P大学に入学したこと」に対する満足度は、「First-Generation」学生の方が高い。かれらの66.3%は「現在の学生生活」に「とても+まあ」満足し、71.3%が「P大学に入学したこと」に「とても+まあ」満足している。同じ項目に対する「non First-Generation」学生の回答は、順に59.4%、62.8%であった。また、僅差ではあるが、「P大学が好き」な「First-Generation」学生は、「non First-Generation」学生より多い。これらから、「First-Generation」学生は、P大学への入学やそこの生活に満足していることがうかがえる。

しかし、「First-Generation」学生たちの7割以上は、「大学を辞めたい」と「何度も一度は」思ったことがあり、「non First-Generation」学生の5割強より多い。また、「教員を

強く志望」している‘ First-Generation ’学生は2割程度で、‘ non First-Generation ’学生が3割強であるのに比して低い。そのためか、‘ First-Generation ’学生の8割以上が、「勉強での悩み」を「とても+少し」抱えている。ただし、‘ non First-Generation ’学生の76.3%は同様の悩みがあると答えているので、両群の差は小さい。

また、「今の自分に自信がある」のも「ボランティアをしている」のも「両親に大学であったことを話す」のも、‘ First-Generation ’学生より‘ non First-Generation ’学生のほうが多い。特に「両親に大学であったことをよく話す」では、両群間に約10ポイントの差があり、‘ First-Generation ’学生が大学生活について家族に話すことが少ない様子がうかがえる。また、ボランティアのように学業に直接関係しない活動についても、両群に差異が見られる。

このように、‘ First-Generation ’学生は、大学を辞めたいと思ったことがあったり、教員を志望していなかったり、勉強上の悩みがあったり、また家族に大学での出来事をあまり話せないことなどから、大学生活を継続することに意味が見出せないようにみえる。しかし、かれらの9割以上が「4年で卒業できる(できる+多分)」とまっていることから、怠学傾向をもっているということではないと考えられる。

授業で使用する言葉の理解度

調査対象者たちが受講する授業において使用する言葉のうち、6つ(a. 高等教育, b. 識字率, c. ジェンダー, d. 事実婚, e. 性同一性障害, f. 3歳児神話)について、どの程度わかるか尋ね、「他人に説明できるくらい理解している」「だいたいわかる」「ほとんどわからない」「初めて聞いた」の4段階で回答を得た(表8)。

表8 授業で使用する言葉の理解度

	全 体	F G	N F
a. 高等教育			
他人に説明できる	5.6	3.0	10.2
だいたいわかる	66.9	69.3	62.7
ほとんどわからない	26.9	26.7	27.1
初めて聞いた	0.6	1.0	0.0
b. 識字率			
他人に説明できる	25.0	20.8	32.2
だいたいわかる	30.6	31.7	28.8
ほとんどわからない	23.8	27.7	16.9
初めて聞いた	2.5	19.8	22.0
c. ジェンダー			
他人に説明できる	20.0	17.8	23.7
だいたいわかる	49.4	51.5	45.8
ほとんどわからない	28.1	27.7	28.8

初めて聞いた	2.5	3.0	13.6
d. 事実婚			
他人に説明できる	6.3	5.9	6.8
だいたいわかる	32.5	29.7	27.2
ほとんどわからない	40.0	38.6	42.4
初めて聞いた	21.3	25.7	13.6
e. 性同一性障害			
他人に説明できる	35.0	30.7	42.4
だいたいわかる	59.4	61.4	55.9
ほとんどわからない	5.0	6.9	1.7
初めて聞いた	0.6	1.0	0.0
f. 3歳児神話			
他人に説明できる	6.3	5.9	6.8
だいたいわかる	22.5	17.8	30.5
ほとんどわからない	36.9	34.7	40.7
初めて聞いた	34.4	41.6	22.0

「d. 事実婚」と「f. 3歳児神話」における理解度に両群間の差はほとんどないが、「説明できる」とする 'First-Generation' 学生は、6項目すべてにおいて 'non First-Generation' 学生を下回った。「説明できる」と「だいたいわかる」を合わせても依然として差が大きいのは、「b. 識字率」と「f. 3歳児神話」であった。'First-Generation' 学生にとっては、理解度の高くない言葉が含まれているようである。

以上のように、'First-Generation' 学生は、その大学生活に満足し、遅滞なく卒業できると答えている。したがって、NCES が報告したように、'First-Generation' 学生が成功していないと言うことはできない。しかしながら、退学を考えたことが多かったり、勉学面での悩みを抱えていたり、大学での出来事を両親に話せないなど、大学からの離脱につながりやすい傾向が見つけられることは懸念される。

本章では、調査をもとに 'First-Generation' 学生の諸側面を把握してきたが、NCES が報告したほど 'non First-Generation' 学生との格差は顕著ではなかった。確かに 'First-Generation' 学生は、家庭的背景や出身高校の文化などの面において、'non First-Generation' 学生よりも大学への距離を感じる社会的位置にいるようではある。しかし、高校からの学業支援や受験アドバイスなどを受けて大学へ入学し、入学後の学生生活もそれほど困難にはみえない。

しかし、この結果をもって、日本の 'First-Generation' 学生に対する学習支援が必要ないとはいえない。なぜならば、NECS がポストセカンダリーにおける多様な 'First-Generation' 学生について言及しているのに対し、本調査はポストセカンダリーの教育機関全体から見れば、低レベルではない学生にしか調査を実施していないからである。すでに一定の選抜をくぐり抜けた学生たちであることを考慮すれば、本調査の対象者は成功し

た‘ First-Generation ’であり, ‘ non First-Generation ’ 学生との格差が小さいことは当然ともいえる。むしろ, その意味では, 本調査の対象者ですら, ‘ First-Generation ’ 学生が大学からの離脱傾向を潜在的に所有しているという結果は, 日本の高等教育機関においても ‘ First-Generation ’ 学生の問題が顕在化しつつあるとみた方がよいかもかもしれない。

3 隠れた ‘ First-Generation ’

ところで, 日本の教育社会学や高等教育研究は, 大学における ‘ First-Generation ’ を見過ごしてきたのだろうか。現時点では, 無意識下で気づき, 研究してはきたが, カテゴリーとして発見していないと答えることができるであろう。

従来から, 教育達成と社会階層などの家庭環境に着目した分析は多々行われてきたし, 教育達成に学校はどの程度の影響を及ぼすのかという関心も, 長らく共有されてきた¹⁵⁾。経済的な格差が解消されても, あるいは解消すべく措置を講じても, 依然として残る学業成績や教育達成の格差は, われわれの関心事であった。また, 文化的再生産論のように, 子どもの出身階層の文化が学校文化と適合的で親和性がある場合, その子どもは学校で成功しやすいという議論は, 教育社会学にとってはおなじみである。

さらに, 親の学歴に注目し, それが子世代の教育アスピレーションや学歴取得や社会的地位に影響を及ぼすことを, 多くの先行研究が明らかにしてきた¹⁶⁾。つまり, これまでの研究にも ‘ First-Generation ’ は, 隠れていたのだ。しかしながら, カテゴリーとして ‘ First-Generation ’ に着目してはこなかった。本稿で参照した NCES などが政策的志向性をもち, ターゲットグループとして ‘ First-Generation ’ を発見したのに対し, 教育社会学のもつ事実学という学問的志向性からすればもっともなことである。

われわれは現在, 大学大衆化という問題に直面し, 高校と大学の新しい接続のあり方が模索されている。大衆化は, 高等教育市場や大学市場に ‘ First-Generation ’ 学生がニューカマーとして増大することを意味し, 大学における初年次教育をはじめとする教育のあり方を変容させるものでもある。あるいは, 需給バランスからみれば, 全入時代が到来しても, ‘ First-Generation ’ 学生たちの参入障壁はなくならないかもしれない(文化的非連続性のため)。こうした将来を見据えるとき, ‘ First-Generation ’ という新たなカテゴリーについて調査研究を進めることが必要となるのではないだろうか。

本稿では, 小規模の調査結果しか用いることができなかったが, 今後, 大規模な調査を実施し, 日本のポストセカンダリーにおける多様な ‘ First-Generation ’ 学生の把握に努めたいと思う。

註

1) <http://www.uwrf.edu/academic-success/Trio/trio.html>

2) <http://www.ed.gov/offices/OPE/HEP/trio/grantaidletter-t3and5.html> および,
<http://www.ed.gov/offices/OPE/HEP/trio/studaupp.html>

3) Goals 2000 : Educate America Act [P. L. 103 - 227]

4) 要旨 すべての子どもが就学時に支障なく学習活動に取りかけられるように, 就学前段

階において十分な援助を提供する。ハイスクールの卒業率を90%以上に引き上げる。

第4, 8, 12学年に主要教科についての学力測定を実施する。また, すべての学校は, 児童生徒が責任ある市民となるとともに, 卒業後も学習を継続して, 生産的な労働者となることを可能とする教育を行う。すべての教員が継続的に職能の向上を図るとともに, 次世代を担う児童生徒を指導するのに必要な知識・技能を獲得するための教育・研修機会を得る。数学および理科における世界最高水準の学力を達成する。すべての米国の成人は, 読み書き計算能力と国際競争の中で生き残れるだけの職業技能を備えるとともに, 市民としての権利を主張し, 責任を果たす労働者でなければならない。すべての学校を, 暴力と薬物に汚染されていない, 子ども達の学習に適した, 規律ある環境として維持する。すべての学校は, 子ども達の社会的, 情緒的成長および学力の向上に向けて教育に関する親の関与を増大させるよう連携協力体制を強化する。(以上『諸外国の初等中等教育』文部科学省, 2002)

- 5) 藤井佐知子 2001 「新アドミッションシステム導入の政策的背景」教育制度学会発表資料
- 6) *First-Generation Students : Undergraduates Whose Parents Never Enrolled in Postsecondary Education* (<http://nces.ed.gov/pubs98/98082.html>)
- 7) Laura Horn and Anne-Marie Nunez, *Mapping the Road to College : First-Generation Students' Math Track, Planning Strategies, and Context of Support* (<http://nces.ed.gov/pubs2000/qrtlyspring/5post/q5-1.html>)
- 8) Edward C. Warburton, Rosio Bugarin, and Anne-Marie Nunez, *Bridging the Gap : Academic Preparation and Postsecondary Success of First-Generation Students* (<http://nces.ed.gov/pubs2002/quarterly/fall/q4-2.asp>)
- 9) 高等教育ではなく, 中等教育終了後の教育という観点の調査である。
- 10) さらに先行研究から, ミドルスクールでの代数の選択は, 高校での上級数学への「ゲートウェイ」になっている (Oakes1990) ことがわかっている。
- 11) 同書の調査対象校699校のうち, 開設3年以内の大学を除いて, 上位30%がAランクである。
- 12) 全国536校の高校の進路指導教諭から10件以上名前があがった133大学を対象とし「生徒に薦めたい」進学して伸びた「広報活動が熱心」の3項目についての総合評価。上位30%がAランク, 次の40%がBランク, 次の30%がCランクである。
- 13) 父親が4年制大学を卒業していない学生で, 母親が4年制大学卒業である場合は2%。
- 14) 「あなたの出身高校について, 4年制大学進学者の割合をお答えください」に対する回答状況は以下の通り。

参考 出身高校の4年制大学進学率

	全 体	F	G	N	F
10% 以下	5.0	6.9			1.7
10 - 20%	5.0	5.9			3.4
20 - 30%	11.9	13.9			8.5
30 - 50%	10.6	11.9			8.5
50 - 70%	20.6	17.8			25.4
70 - 90%	25.0	25.7			23.7
90% 以上	15.6	10.9			23.7

- 15) SSM 調査をもとにした「教育と社会階層」の諸研究に代表される。最近では、尾嶋(2002)、志水ほか(2002)など。
- 16) 例えば、武内清代表『東京都こども基本調査』では、母学歴と父学歴のマッチングによって両親の所有する学歴タイプを4分類し、分析に使用している。なお、浜島・武内(2002)は、同調査15年間3地点(1983, 1989, 1998)を用い、親の学歴等も変数として、子どもの進学アスピレーションの規定要因を探っている。

参 考 文 献

- 朝日新聞社 2002 『大学ランキング』
- 天野郁夫 2002 「高等教育の構造変動」『教育社会学研究』第70集, pp. 39 - 57 .
- 市川昭午 1995 「大学大衆化と高等教育政策」市川昭午編『大学大衆化の構造』玉川大学出版部, pp. 9 - 57 .
- 江原武一 1989 「成人学生の増加と改革 - アメリカ」『高等教育研究紀要』第9号, 高等教育研究所, pp. 12 - 33 .
- 尾嶋史章 2002 「社会階層と進路形成の変容 - 90年代の変化を考える - 」『教育社会学研究』第70集, pp. 125 - 141 .
- 加野芳正・浦田広朗 1997 「チャイルドショックと教員養成学部 - 脱教職志向学生の増加とその要因 - 」『日本教師教育学会年報』第6号, pp. 77 - 94 .
- 志水宏吉・清水睦美, 鍋島祥郎, 諸田裕子, 高田一宏, 葛上秀文 2002 「学業達成の構造と変容(2) - 社会集団と学校効果 - 」日本教育社会学会第54回大会 学校(2)部会 当日配布資料
- 東京都生活文化局 1984, 1990, 1999ほか 『子ども基本調査 大都市における児童・生徒の生活・価値観に関する調査報告書』
- 浜島幸司・武内清 2002 「子どもの進学アスピレーションの規定要因に関する研究 - 都市小中学生の15年間の変容 - 」日本教育社会学会第54回大会 学校(2)部会 当日配布資料
- 藤井佐知子 2001 「新アドミッションシステム導入の政策的背景」教育制度学会 当日発表資料
- 文部科学省 2002 『諸外国の初等中等教育』
- 吉田 文 1999 「アメリカの大学・高校の接続 - リメディアル教育と一般教育 - 」『高等教育研究』第2集, pp. 223 - 245 .
- Oakes, J. 1990 'Lost Talent : *The Underparticipation of Women, Minorities, and Disabled Persons in Science*', Santa Monica, CA : The RAND Corporation.
- Riley, R. W. 'Mathematics Equals Opportunity,' white paper prepared by the U. S. Secretary of Education. Washington, DC : US. Department of Education

Summary

KAWANO Ginko : First-Generation Students in Japanese University

This paper gives an outline of ‘First-Generation’ (the 1st generation of university) and investigation research in the university in the United States, and it grasps many features of ‘First-Generation’ in Japan.

Chapter 1 describes a U. S. situation. The university in the United States has student support services for ‘First-Generation’ as a measure of massification. ‘First-Generation’ is a student in whom parents have no education beyond high school. They exhibit different college enrollment and persistence behaviors than students whose parents have more education. NCES reported about ‘First-Generation’s some findings in 1998, 2000, 2002. Those results suggests that, while ‘First-Generation’ status is an important predictor of success in postsecondary education, rigorous preparation in high school substantially narrows the gap in postsecondary outcomes between ‘First-Generation’ and students whose parents graduate from college.

Chapter 2 reports about ‘First-Generation’ in Japanese university. The questioner took effect for P university student. The ‘First-Generation’ student was a little more than 60 percent. More male students than female students are higher ration of ‘First-Generation’, and they live with a parents’ in P prefecture. ‘First-Generation’ students aren’t on the teacher license track. Investigation showed that it could not be said that the ‘First-Generation’ student is not successful, as NCES reported. ‘First-Generation’ student in Japan are successful of campus life. Although ‘First-Generation’ student will ask for actual profit for 4-years institutions, and do not think as important experience which is not directly related to studies, and they graduate without delay. However, we can see the tendency to lead to secession from a university. There are few ‘First-Generation’ students which understand some words in class than a ‘non First-Generation’ student. They have considered withdrawal from school and also have the trouble to study.

In Chapter 3, usual study of Japan in sociology of education was described on educational attainment and socio-economics including family factor or parent’s education, but they didn’t find the word ‘First-Generation’ student. We are now faced with university massification. It means that ‘First-Generation’ student increases as a newcomer. I want to research on ‘First-Generation’ students in post secondary education in Japan.

(Section of Education, Faculty of Education)

